HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	突然変異と恋愛の不確かさ : 有島武郎『宣言』論
Author(s)	中村, 建
Citation	層 : 映像と表現, 16, 161-176
Issue Date	2024-03-28
DOI	https://doi.org/10.14943/109369
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91450
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_10_P161-176.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

突然変異と恋愛の不確かさ

――有島武郎『宣言』論――

中村　建

はじめに

有島武郎の書簡体小説『宣言』は『白樺』（大四・七、一〇～一二）に連載された。その後、加筆修正されて有島武郎著作集第二輯（大六・一二、新潮社）として刊行された。物語は、青年A・Bによる往復書簡と、物語終盤のAの書簡に引用される女性Y子の手記によって構成され、AのY子への恋愛の告白を中心とする前半（一九一二・九・一五～一〇・二二）と、BとY子の接近を中心とする後半（一九一四・一・四～二・二三）の時期に分かれる。これらの書簡における年月日は一貫して西暦で表記される。三角関係を題材とした小説として本作と比較される、夏目漱石『こゝろ』（大三・九、岩波書店）が乃木希典の自殺を象徴的に取り上げたのとは対照的に、『宣言』では最初の書簡の日付がこの事件の二日後であるにも拘わらず一切言及されず、また明治から大正への元号の変化も想起されない。一方で、作中に多くの恋愛物語が引用されるという点では、同じく漱石の『それから』（明四三・一、春陽堂）と類似している。

有島武郎研究の端緒を開いたのは本多秋五であるが、『宣言』については「四畳半の浅酌低唱をイタリヤの大オペラ並み」に扱う、「物々しい文体」[1]であると批判した。一方安川定男が、「近代的個人主義の自覚を前提として始めて提起された運命的

な恋愛と友情との葛藤の問題を、漱石が提起したよりももっと明確な主題的意図のもとに取り上げて追求した、日本で最初の小説」[2]と述べて以降、運命的な恋愛と友情の葛藤という三角関係を描いた小説として評価されるようになった。特に、山田昭夫は「三角関係に決着をつける決定権を握っているのはY子だから、彼女こそ主役である」[3]と論じ、その後の多くの研究に影響を与えた。つまり、男性であるA・Bが批判的に見られたのに対し、女性であるY子が真の「覚醒」を果たしたとして、特別な地位が与えられてきたのである。とりわけ、Y子に婚約を破棄されるAに対する批判は大きく、板井浩子は「AがY子への愛と誤認しているその内実は、性的なものの吸引力ではないか」[4]とし、吉田俊彦は「制度化された日常的習慣や権威を拠り所に純化された独善的愛の、不遜な権威主義と滑稽な虚妄性を見出すことが出来る」[5]と強く批判した。また、Y子に選ばれたBへの批判は多くないものの、事態の変化を正確に報告せず仄めかしに終始している点が指摘された。例えば野島秀勝は、「突然変異説に託して変心を自らに正当化しようとする底意は、いささか卑怯不潔ではないか」[6]と述べているが、この突然変異説の引用については本稿で詳しく論じる。

一方、Y子については、石丸晶子が、「Y子の深い「覚醒」が、Bの煮え切らない半端な「覚悟」を彼女と同じレベルの「覚醒」へと連れ出した」[7]と述べ、佐々木靖章も、「Y子の霊力」によりBも「霊と肉の一致の境地」に向かい、この二人が「相互補完的存在」[8]になるとした。このようにY子の覚醒を特権化する傾向は、人物論に傾きがちであったそれまでの研究に対し、真実を述べる筈の書簡や宣言の虚構性や不透明性を指摘した中村三春の研究においても同様である。すなわち、「成長によって真実の愛に覚醒し、不自然な外的束縛である結婚を打ち破るY子の姿が鮮明に造型されているという評価は動かないだろう」[9]と述べている。確かに、『宣言』には恋愛物語を初めとする多くの書物がAとBの書簡に引用され、彼らはそれらを受容し、模倣することで恋愛している。一方、Y子は一見自分の言葉で告白しており、真の「覚醒」を果たしたと解釈できる。この様相を踏まえた石田仁志は、『宣言』が二人の男性による恋愛物語の形成と解体であり、Y子の「覚醒、自覚」が彼らを相対化するものであるとしつつ、彼女の「「恋」はあまりにも唐突であり、彼女が手記で語る「成長」が「心に起きる性欲」の自覚でしかないとしたら、それもまた浅薄である」[10]とも述べている。このような石田の指摘や、書簡の虚構性という前述の中村の論を踏まえれば、AやBだけでなく、Y子をも相対化する必要があるのではないか。

本稿では、『宣言』の書簡に、突然変異説という生物学上の

学説を始めとして、聖書、恋愛物語、絵画などが多く引用されていることに注目する。最初に、有島武郎の突然変異説の受容および、『宣言』での同説への言及について確認する。次に、『宣言』の登場人物が多様な引用によって、自身をそれに擬えながら恋愛を進展させるという側面について述べる。最後に、突然変異説が他の恋愛物語と同様に、三者関係の変異を正当化する機能を有しつつ、恋愛そのものの不確かさを示唆する機能も合わせ持っていることを論じる。

一　『宣言』における突然変異説の受容

AとBは生物学を専攻する学生であり、Bは結核を患っているという設定である。物語の前半では、東京のAと那須に滞在するBとの間で書簡が交わされる。後半では、Aが父の死去に伴い、実家の生計を立てるために仙台に帰郷する一方、Bは小笠原諸島で研究に必要なデータを集めた後、東京に戻って論文を執筆している。このため、Y子に関する話題に混じって、彼らの専門である生物学に関する話題も書簡に登場する。例えば、最初の書簡（九・一五）でAは、「皆んなで羽田の方に採集に行く筈だつた」[11]と述べ、Bの「蜻蛉の幼虫と気管に関する研究」を読もうとしたとも書いている（一〇・六）。後半でもAは、「Mendelismus」（遺伝学）についての本を読んでいると述べている（一・一二）。また、後に引用するように、Bは突然変異説を実証しようとする旨を書いており、これが三者関係を暗示している。

この突然変異説とは、一九〇一年にオランダのユーゴー・ド・フリースによって提唱された学説であり、遺伝物質が突然変化することによって、生物の進化への材料を提供するというもので、現在では広く認められているところである。しかし、『宣言』の舞台である一九一〇年代（大正初期）には、佐々木さよが「動物による証明が不足」[12]していたと述べたように、突然変異説をめぐって世界的に議論が分かれていた。例えば、同時代の日本の進化論の教科書として著名なものに、永井潜『生命論』（大二・七、洛陽堂）と丘浅次郎『増補進化論講話』（大三・一一、開成館）がある。このうち永井は、「ダーヰンの淘汰説の如く、外界の変動によつて惹起された形質の変化に重きを置くのは頗る其当を失つた者と言はねばならぬ。茲に於てかド、フリーは、新種族を分ち出す原因として激変の現象が尤も大切なる者であると主張するに至つたのである」[13]と突然変異説を肯定的に紹介した一方、丘は「新しい種属の起る源は、全く突然変異のみに限ると説いて居るが、多くの事実に照らし合せて見ると、是は余程疑はしい」[14]と否定的であった。この

ような時代背景のために、Bは「Fauna」（動物相）のデータに基づいて突然変異説を証明しようとしていたのであった[15]。

続いて、『宣言』の作者である有島が突然変異説を受容した経緯についてであるが、現時点では不明な部分が多い。ただし、前述の佐々木も指摘しているように、有島の札幌農学校時代の同級生に木村徳蔵という生物学者がいたことと、これに加えて、有島の東北帝国大学農科大学の教員時代に交流があった学生の中に後の遺伝学者・田中義麿[16]がいたことから、これらの人物から知った可能性が高い。

その受容の過程は判然としないものの、突然変異説が人間論に拡大解釈されることによって、有島の「本能的生活」論を支える論拠となっていることは既に中村三春[17]が指摘した通りである。例えば、「内部生活の現象」（『婦人之友』大九・一）では、ド・フリースが実験によって明らかにした、「月見草」（オオマツヨイグサ）における突然変異が紹介され、「月見草の内的本能の現れ」であるとされる。その上で、「人間にあってもこの強い要求なり本能なりは、一人々々の人間の内部に、積極的に外界を創造しようとする衝動となつて現はれ」ると主張されている。また、代表的な評論「惜みなく愛は奪ふ」（有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』大九・六、叢文閣）でも、このような衝動こそが各個人の個性を創造する力であるという論が展開されている[18]。

では、『宣言』において突然変異説はどのように登場するのだろうか。Bは、二月三日の書簡で次のように書いている。

> 僕は終日研究室にあつて、獅子の如く……真に獅子の如く……働いてゐる。Mutation Theorie の反駁者に対して、ドフリスの為めに援護の陣を張らうとするのだ。僕に取つて、ドフリスの主張する突発変種は可能事だ。僕の内部的要求はその可能を信ぜしめる。——君は僕の先入主観から出発する非科学的態度を嗤はうとするか。然し新学説の唱道者にして、僕と同様に先入主観を持たなかつたものは嘗てない。ダーヰンの自叙伝は最もよく是れを語つて居る。彼れが生物進化の現象に対する暗示を受けた時、彼れの実験は彼れをしてこの大胆なる想像を懐かしむべき程度には達して居なかつた——加之、僕は Fauna 中にもドフリスを利益すべき根拠ある deta を多少集め得たと信ずる。僕は、勿論、科学的良心を忘れて、事実の否定を冒してまで、暗示を弁護するやうな事はしない。然し突発変種の仮説が決定することは、僕に取つて、科学的勝利以上、性格の満足を完らしめるであらう。

Bは自身の「先入主観」から「突発変種の仮説」（突然変異説）を信じ、彼自身が集めたデータによってこれを論証する論文を発表しようとしている。しかし、三日後の六日の書簡でBは、この論文の出版を断ったと述べ、同時にAの妹N子との結婚を申し込む。さらに、翌七日には前日の手紙の「全部」を取り消してしまう。これは、後のY子の手記によって判明することだが、Y子とBの接近を回避するために、彼女がBにN子との結婚を助言し、その取り消しもまたY子の依頼によるものであった。つまり、Bの突然変異説の論文の件と、三者関係の変異とが平行して語られるのである。これについて佐々木さよは、Bが「発見した自然科学的「真実」は明瞭化顕在化し、明視し得たY子との「運命」上の「真実」」を隠蔽する行為は「人間の内面と自然科学とを断絶しない」[19]彼の考え方を裏切るものであると指摘した上で、最終的に人間の内面と自然科学とを統合するのがY子の覚醒であると論じている。Bは一時的に、三者関係の変異と突然変異説が重ね合わせられてしまうことを回避するために、N子への結婚の申し込みと論文の撤回を行った。それに対して、Y子が最終的にBへの恋愛の告白という形で関係の変異を認めたことを踏まえれば、Y子が両者を統合したと言える。しかし、この解釈もまた、Y子を特権化するきらいがある。次節以降では、『宣言』における恋愛物語を初めとする多数の引用についての分析を通して、Y子をも相対化するとともに、突然変異説が引用されている効果について検討する。

二　『宣言』における引用と恋愛の展開

『宣言』では、BがAとY子の媒をする前半、BとY子が接近する後半のそれぞれに、西欧の恋愛物語（演劇）が引用されることによって、三者の関係が暗示されている。

前半では、Aが登別の温泉で目にした見知らぬ少女への恋を告白したのに対してBは、彼女と自分が同じ教会に所属していたために、仲を取り持つ「薔薇の騎士」の役目を勤めると答える（一〇・一八）。これは、ホフマンスタールのオペラ『薔薇の騎士』（一九一一）からの引用である。このオペラは、ある貴族男性の結婚の申込を伝える「薔薇の騎士」の役目を担う青年が、最終的にその女性と結ばれるという内容であるが、『宣言』も同様の結末を辿ることになる。

後半では、BとY子に対するAの疑念が膨らむ中、自身とY子の動静を伝える書簡でBは、ある日二人が「会読」したのが、メーテルリンクの戯曲『アグラヴェーヌとセリセット』（一八九六）[20]であったと述べる（二・九）。この戯曲は、一人の男性と二人の女性という三角関係の中で、女性の一人が残りの二人

のために自殺するという内容であるが、BとY子はこれを読んで「運命の真実」におののいたという。そしてBは、「人間が真実に目覚め」るに従って「苦しい運命に這入り込んで」しまう場合こそが「悲劇」だと書いている。この「運命の真実」とは、もちろんBとY子の接近のことであり、Y子の手記から逆算すると、この会読の時点で既に彼女はBに恋愛感情を抱いていたのであった。

では、物語の展開に即して、それらの引用について確認してみよう。AとBはともにキリスト教徒（後にBは教会を退会する）であったため、物語の序盤ではパウロが説いた禁欲主義と恋愛の関係が語られる。最初の書簡でAは、パウロとトルストイを挙げて恋愛を語ることを躊躇し、Bの恋愛観を問う（九・一五）。これに対してBは、そのような禁欲主義を否定し、「若し僕が、ボードレールより先きに生きてゐたら、彼れをしてあの「陶酔」といふ散文詩を先駆けはさせなかつたらう」[21]と述べて、恋愛を肯定する（九・二〇）。この返事を受けて、Aは自身の恋愛を告白する。Aは幼少期に好きだった女性と、登別の温泉で見かけた少女（Y子）とを重ねせる。その上でAは自分を「ダビデ」に擬えつつ、この少女の姿を「ボッチチェリのヴィナス誕生の画」に例えて彼女の肉体を夢想する。その一方で、「トイフェスドロックのやうに矻々と自分を築き上げなければならない」とカーライルの『衣装哲学』（一八三三〜三四）の主人公の名を挙げて自分を戒める（一〇・六）。

物語の後半では、父の死去により傾いた家産を立て直すべく働くAが、「シラーのロバルトではないが、顳顬から血の滲み出るまで働かう」とシラーの戯曲『群盗』（一七八一）の主人公の台詞を引用している（二一・五）。この台詞は二月一一日の書簡にも登場するが、次に挙げるようにこの手紙では聖書からの引用も見られる。

> 僕は神の摂理によつてアダムがエバを見たやうに、彼女を見たのだ。アダムはエバを措いて牝鹿とは伴偶にはなれなかつた。僕もさうだ。僕は裸かで創り出された事を知つてゐる。僕は神に裸かで創り出された事を知つてゐる。僕は神に対して潔く自分の本来の無一物である事を肯ふが、若しY子が僕から取去られたなら、僕はつぶやかないではゐられないだらう。[…]僕は謙虚であられるだけ謙虚であつた積りだ。僕は顳顬から血の滲み出るまで働かうとした。

Aは二人への疑念を抱きながらも、旧約聖書のアダムとエバを持ち出して、自分とY子の関係こそが神の摂理に従った正し

いものであると信じようとする。この引用部分からも分かるように、Aの引用には「のやうに」と、自らを引用元の内容に重ね合わせようとする表現が頻出し、自身を理想化しようとする姿勢が顕著に表れている。なお、この手紙で聖書が持ち出されているのは、二月五日のAの書簡に引用されているY子の書簡の、聖母マリアが「聖霊を孕」んだような苦しみが、マリアの夫である「ヨセフにも増した善良ななつかしい」Aには理解してもらえないかも知れないという新訳聖書を引用した表現への反応であると言える。このほかAが、自分の父の座右にあった書として「荘子と、スピノザと、カール、マークスの「資本論」」（一・五）を挙げていることも、引用の多さを際立たせている。

一方のBは、二月九日の書簡で、Y子の家に引っ越した当初、自分に割り当てられた部屋に掛けられていた絵画について、次のように述べている。

僅かばかりの荷物を例の赤毛布にひつくるんで、この家に越して来た時、Y子さんの metamorphosis は恐ろしく急激な根本的な相を呈して居た。[…] 僕のものと決められた部屋の壁には、ロゼッチの「ビヤトリス」の見事な複製に並べて、少女雑誌の附録らしい少女の肖像が、趣味の悪い額縁にはめられて懸つて居た。僕は渋面を造りながら荷も解かない中に、その少女の肖像を取り下して、跡にドフリスの写真像をかけて見た。所が「ビヤトリス」と猶更ら妙な取りあはせになつてしまつた。その晩はその儘で我慢したが、翌朝はどうしても落着けないので、「ビヤトリス」も聖座から引ずり降して、ヨークシャーの地質図と取り代へる事にした。

「ビヤトリス」とは、ダンテが生涯愛していたとされる女性のことであるが、「惜みなく愛は奪ふ」では、相互的でない愛の例として引き合いに出されている。この「ビヤトリス」の絵が外されたことは、遠方のAがY子を理想化して愛する一方で、同居するBとY子とが接近しつつあることと、同じ手紙で語られる「久遠の童女を讃美」しつつもその実現が不可能な場合には「資格をかへて女を見る現実主義者」になるというBの立場を暗示している。また、ド・フリースの肖像写真は、Bの研究上の立場のみならず、三人の関係の変異を象徴している。さらに終盤でBは、ローマ神話のヤーヌスを引用し、「僕の心はヂャーナスの首だ」、「僕の心は僕の心を知らない」と友情と恋愛との板挟みになっていることを暗示的に書いている（二・一四）。以上のように、Bも多くの引用を行っているが、Aのよ

うに理想を語るものではなく、三者の関係を暗示するものとなっている。Aにも「君のやうに黙つてゐながら、世の中を知り抜いて」いる（一〇・六）と指摘されたように、Bは自身の感情や状況を直接語ることなく、仄めかしに終始するのである。

このようなBに対し、自身の理想を引用に託しながら語るAの態度については、理想を追い求めるばかりで現実のY子を見ていないとして批判され、Bについては、状況の変化を正確に報告せず、仄めかしにとどめる態度が批判されたことは既に述べた通りである。続いて、真の「覚醒」を果たしたとされるY子について見てみよう。

BがY子の家に同居するようになったのは、AとY子の婚約を解消すべく画策する彼女の継母を阻止するために、二人の仲を取り持った牧師とAの二人に依頼されたからであった。Bの同居は一月一〇日に開始され、Y子が彼を恋するようになったのは、早くも一四日であった[22]。その翌日の一五日の書簡でBは、彼が小笠原におり、AとY子が婚約する前の時期に、「無名で二度Y子さんに手紙を出し」たと述べ、彼女もBが書いたものであることを把握していたという。この時期にはAとBが書簡を交わしていないため、物語で直接語られることはない。しかし、AとY子の婚約の破棄という結末に向けて、事態は着実に進行していたのであった。なぜならば、Bはこの小笠原滞在時に、突然変異説を立証するであろう「相当の創見を含むと自信する六箇の論文」（一・三）を執筆すると同時に、Aに黙ってY子に手紙を出すことで、自分の存在を意識させるという布石を打っていたからである。

その後のBは暗示的な表現に終始しているので、ここからはY子の手記の内容を追ってみよう。最初、Y子は男性を恐ろしい存在だと思っていたが、先のBの「無名」の手紙によって、そうではない感情も芽生えたという。その後、牧師の取りなしによってY子はAと婚約し、一週間を一緒に過ごした。その際、彼女が「始めて性の欲望も目醒め」た一方、Aは彼女の性欲を満たすことがないばかりか、それを窘めるばかりで仙台に帰ってしまった。そのような彼女の前に現れたのが、小笠原から戻ってきたBであった。Y子がBに恋愛感情を抱き始めた日については、次のように記述される。

ある時――それは雨の降る日で御座いました――B様がしみ〴〵私に色々な話をなさつた事が御座いました。B様は固よりお気附きにはならなかつたので御座いますが、その時私は突然B様を恋するやうになつたので御座います――許して下さいまし。こんな明らさまな申し方をするのを許して下さいまし。［…］B様のお話が身にしめば

しむ程、私は紙をはがすやうに快く、自分の目醒めて行くのが判りました。B様をお知り申すやうになつてから、私の心に起る性慾にも、不思議に自然な感じが添つて後ろめたさを覚えなくなりました。

Y子はBを「突然」恋するようになり、性欲にも後ろめたさを感じなくなったのであった。その後、彼女はBから感じる力に抗うため、「苦しまぎれ」にAの妹N子と結婚するように勧め、Bはそれに従った。しかし、Y子の意向でその申込を取り消させたという。結局、彼女はBを「恋してゐる」ことを告白して、手記は終わる。

このようなY子の変容についてAとBは、「運命」であり、彼女の「覚醒」として認識している。しかし、Y子の手記は、前掲の引用部分のように自身の心情の変化の告白の一方で、多くの部分がAへの弁明によって占められ、彼女がBに恋愛感情を抱く理由については語られない。石田仁志が「浅薄」と述べた通り、彼女の恋愛の内実は、遠くに行ったAによっては満たされなかった性欲が、近くにいるBによって満たされたので心変わりした、と要約するしかないのである。

以上のようなY子の行動を踏まえれば、彼女の告白を手放しで「覚醒」と賞賛することはできず、その「覚醒」も深い内実を伴うものではない。また、物語の構造という次元から見れば、後年の中村三春[23]が指摘したように、登場人物の造型は全て物語の構造上の設定であって、三角関係を題材とする『宣言』のような物語にあっては、理由が何であろうと最終的にBとY子が結ばれるのは当然の設定である。ただし、再び登場人物の次元に戻ると、本多秋五が「物々しい」と批判した文体や表現によって、書簡が交わされることの意味を考える必要があろう。

三　恋愛の不確かさ

ところで、人類の歴史において恋愛と見做せる感情や行動が普遍的に存在することは確かだろう。一方で、『宣言』に見られる、恋愛によって男女が結びついて結婚するという価値観は、明らかに近代のロマンティック・ラヴ・イデオロギーに基づくものである。仮に、他者に恋愛感情を抱くこと自体を一次的な恋愛とするならば、その恋愛をどのような形で展開するのか――例えば、片想いを続けるのか、性的関係をもつのか、結婚するのか――という部分は、既存の物語やイデオロギーから強い影響を受け、謂わば二次的な恋愛となる。すなわち、亀井秀雄が「恋愛とは感性を制度化するための物語的な言説以外ではない」[24]と指摘した通り、ロマンティック・ラヴ・イデオ

ロギーなどの外在的な要素によって、恋愛感情は制度化されるのである。そのように制度化される過程については、他者の欲望を欲望するという、ルネ・ジラール[25]の「欲望の三角形」の枠組みや、恋愛で何をすべきかを恋愛物語のような書物が齎すというロラン・バルト[26]の恋愛論によって夙に知られている通りである。

『宣言』においてもその傾向が見られることは、前節で確認したように、多数の書物の引用があることからも明らかである。特に、物語の前半に『薔薇の騎士』、後半に『アグラヴェーヌとセリセット』という二つの恋愛物語が引用されていることは既に確認した通りである。これについて山田昭夫は、前者については登場人物の心理を超えた「悲劇の胚珠が匿され」、後者については「運命の人智を超えた不可測性と脱出不能状況の拘束力の絶対性」[27]が語られると解釈した。確かに、これらの引用は三者の結末を暗示する機能を持っているが、それよりもむしろ、書簡の書き手である登場人物による恋愛物語の模倣という側面に着目すべきではないだろうか。というのは、AやBが突然変異説のほか、聖書・文学・絵画など多数の引用を行い、理想であれ暗示であれ、それらに自身を擬えているからである。書簡に物語を初めとする様々な書物が引用されることにより、その書簡自体が物語となって、三者の関係が事後的に、絶対的な運命であるかのように仮構され、まさに彼らの恋愛は「制度化」されるのである。

その制度化とはすなわち、（近代日本では一般的ではなかったものの）恋愛を経た、一対一の永続的な結婚という世俗の規範と、三角関係というそこからの逸脱である。『宣言』が舞台とした時代には、一対一の婚姻関係から逸脱するような行為は姦通罪などによって、特に既婚女性に対して禁じられていた。一方、物語の場合には、三角関係はありふれた題材であり、一対一の関係から逸脱することが制度化されていたと言える。つまり、現実では逸脱とされる不倫のような行為も、三角関係という物語の規範の中に回収される部分があるということである。そして、『宣言』の場合には、突然変異説がそのような逸脱を正当化する機能として用いられた訳だが、突然変異説は別の機能も有しているのではないだろうか。

生物の進化に突然変異が寄与していることは既に述べた。その突然変異によって生じた多様な生物の種はその後、生き残るか絶滅するかする。これについて吉川浩満[28]は、種の生存／絶滅による生物の進化には、「運」という理不尽さが伴うと論じ、その上で社会進化論のような誤った説明によってそのような理不尽さが覆い隠されてしまう危険性を指摘している。実際、生物学の学説を社会や人間の関係に当てはめる疑似科学的な言説

はしばしば見られ、それは『宣言』においても同様であって、Bによる引用に留まらず、前述の佐々木さよの「AとBとの間に働いた自然選択は条件に適応する者としてBを選択したと言えようか」[29]という解釈にも現れている。しかし、突然変異が無目的なものであり、生物の進化に一定の方向を齎すものでないということと、先にも挙げた突然変異説を援用した、人間の内部の衝動が外界を創造するという有島の主張を踏まえれば、『宣言』に引用される突然変異説のもう一つの機能が浮き彫りになる。あえて、生物学の学説で三者関係を説明するという擬似科学的な論説の枠組を利用して言えば、突然変異が無目的であるということが、恋愛の不確かさを示唆しているのである。突然変異から導かれる「衝動」は一対一の関係からの逸脱を正当化するのと同時に、「運命」の必然性を揺るがすのである。

このことは、後年の有島が評論「自己の要求」（『改造』大一〇・一）などで主張した、同時に複数の人物に恋愛するという「恋愛の多角性」[30]や『宣言』以後の有島の文学テクスト[31]を踏まえれば、より明らかになるだろう。すなわち、後年の有島が、恋愛を一対一に留まらないものであることを考えていたことと、『迷路』（大七・六、叢文閣）のAや『或る女』（大八・三、六、叢文閣）の葉子などのような、突発的に恋愛対象を変える人物が描かれたことを踏まえれば、そのような恋愛の不確かさが『宣言』に胚胎していたと見做せるのではないか。それゆえ、暉峻康隆が言うように、「最も直接的に生活との繋りを有する」[32]ジャンルである書簡体小説であるにも拘わらず、多数の引用とそれに自身を重ね合わせるような「物々し」（本多秋五）い文体は、書簡のやり取りを通して、「運命」が事後的に構築されるということを示すために必然的に選ばれたものであったと言える。

おわりに

本稿では、『宣言』の書簡に、西欧の恋愛物語を初めとする多数の引用がなされることによって、必然的な「運命」が事後的に構築される側面を明らかにした。その中で、突然変異説は、三者関係の変異を正当化するという、他の引用と同様の機能を持つ一方で、恋愛の不確かさを示唆する機能も有していることを述べた。さて、『宣言』以降の有島の恋愛を題材とした文学テクストにおいては、三角関係にとどまらない、より複雑な関係が描かれることになる。特に、晩年の『星座』（大一一・五、叢文閣）においては登場人物のそれぞれに焦点化するという手法によって、事態が多面的に描き出されている。これに対して『宣言』の場合には、同時代の読者である山本方平が、「あの錯

綜した事件が末節に到つて、いきなり直線的な単純に遁れて居はしませんか？　偏智的な技巧的な愛が末節で単純なplayを演じて居ると云ふより他私には思へません」[33]と、Y子の告白以降の結末が一つに収斂してしまっているのではないかと批判していた。

確かに、三者の関係のみを見ればその通りだが、Aの妹N子にまで視野を拡げると、事態はそう単純なものではなくなる。BがN子との結婚の申込と撤回を繰り返したことは既に確認した通りであるが、これによって彼女は大きく翻弄されることになった。Aによると、元々N子はBに関心を寄せ、本人に会ってからは「崇拝」し、「熱愛」する程であったという（二一・八）。一方で、N子との結婚の申込と撤回を繰り返すBに対してAは困惑し、Bの申込を了承しなかった。また、これに並行してN子は、仙台の「理科大学の応用科学科の助手」からも縁談を申し込まれるという状況にあった。この情報を受けてか、Bは二月一四日に再度、「僕はN子さんと結婚したい」と「宣言」するも、一七日の電報で取り消される。Y子による真相の告白を経て、Bは「N子さんの好意」など全てを捨てて、Y子と共に戦うことを「宣言」する（二一・二一）。

このように、小説の題名でもある「宣言」は、N子とも大きく関わっており、小説の最後の書簡でAは、自身を差し置いて「失恋の妹」と書いている（二一・二三）。Y子の告白とBの最後の宣言によって、A・B・Y子の三者の関係は収斂するが、彼らとの関係に組み入れられたN子については収斂されることがないのである。渡部杏美は、『宣言』のような複数の人物による書簡体小説の特徴として、「同一の事象にいくつもの視点や解釈が提出され」[34]ると述べたが、現実を直視しないAと暗示に終始するB、そして真相を告白するY子という三者の書き方の特徴は、既に中村三春[35]も論じたように真相の露呈が最後になされるという物語の構造に従ったもので、事態を多面的に描くものではない。むしろ、書簡の書き手ではないものの、そのような構造に収まりきらないN子の造型こそが後年の有島の様式に繋がる部分を有していたのではないだろうか。そして、三者関係の変異が、N子にまで波及してしまうという部分にも、恋愛の不確かさが現れていると言えるだろう。

また、『宣言』では、Bの突然変異説を立証する論文という関する科学（生物学）の問題と、三者関係の変異という恋愛の問題が平行して進展した。これは、妻の死因を科学的に証明しようとする一方、解剖の結果自身の説が立証されるも虚無感に襲われるという「実験室」（『中央公論』大六・九）の内容とも関わりがある。すなわち、科学と恋愛（夫婦愛）とが平行して描かれるということであるが、これについても今後検討する必

要がある。

附記

引用文中、歴史的仮名遣は原文のままとし、旧字体は新字体に改めた。なお、引用文中の傍線は引用者によるものである。引用した有島武郎のテクストは筑摩書房版『有島武郎全集』全一五巻別巻一（昭五四・一一～昭六三・六）に拠った。また、『宣言』の書簡を引用する際、年は省略した。本稿は第八五回日本比較文学会全国大会（令和五年六月一一日、東京外国語大学）における口頭発表を元にしている。学会にてコメントを下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

注

1 本多秋五「有島武郎論」（『『白樺』派の文学』昭二九・七、大日本雄弁会講談社）、二二六頁。

2 安川定男『有島武郎論〔増補版〕』（昭五三・五、明治書院）、二〇〇頁。

3 山田昭夫「「宣言」の内部構造」（『有島武郎　姿勢と軌跡』昭四八・九、右文書院）、二三〇頁。

4 板井浩子「『宣言』の世界――「恐ろしい力」解明への一考察――」（『キリスト教文芸』五、昭六二・一一）、四七頁。

5 吉田俊彦「『宣言』論」（有島武郎研究会（編）『有島武郎研究叢書第一集　有島武郎の作品（上）』平七・五、右文書院）、一〇七頁。

6 野島秀勝「『宣言』――或る女の感情教育――」（『国文学　解釈と鑑賞』平一・二）、八七頁。

7 石丸晶子「『宣言』論――「奇妙な日常」と「奇怪な姿」への旅立ち――」（『有島武郎――作家作品研究――』平一五・四、明治書院）、一二八頁。

8 佐々木靖章「「宣言」における青春回復への祈り――有島武郎とキリスト教の一断面――」（東北大学日本文芸研究会『文芸研究』八八、昭五三・六）、四一頁。

9 中村三春「不透明の罪状　『宣言』」（『新編　言葉の意志――有島武郎と芸術史的転回』平二三・二、ひつじ書房）、一二四頁。

10 石田仁志「「宣言」論――恋愛物語の形成と解体」（『国文学　解釈と鑑賞』平一九・六）、一三六頁。

11 その代わりにAは「小石川の植物園の方」に散歩に行ったと述べているが、これは、登別の温泉で見かけた少女が、宿帳の住所によって小石川に住んでいることが分かったためであり、Aは恋のために「採集」のような研究に手が付かなかったことを示している。

12 佐々木さよ「『宣言』論――自然科学との関連から――」（『文芸と批評』七（一）、平二・四）、六六頁。

13 永井潜『生命論』（大二・七、洛陽堂）、二五九頁。

14 丘浅次郎『増補進化論講話』（大三・一一、開成館）、五八一頁。

15 なお、日本におけるド・フリースの紹介に関する研究としては、横山利明『日本進化思想史（四）』（平二七・七、新水社）がある。

16 田中義麿の有島への追悼文「或る時代の有島さん」（『文化生活』記念増大号「純真の人有島武郎」大一二・九）に、東北帝国大学農科大学在学中に有島と交流したという記述がある。また、田中の同大学在学中の日記が北海道大学文書館に所蔵されている。山本美穂子「田中義麿日記「未央日記」をめぐって（一）――日露戦争下における札幌農学校予修科の学生生活」（『北海道大学文書館年報』一七、令四・三）によると、現在この日記の翻刻作業が進められているという。田中の日記を元にした研究が俟たれる。

17 中村三春「魂に行く傾向」有島武郎におけるウォルト・ホイットマンの閃光」（前掲書9）。

18 なお、「惜みなく愛は奪ふ」でド・フリースが言及されている箇所には、ベルクソンへの言及もある。有島がベルクソンの『創造的進化』（一九〇七）を受容していたことは、大正二年前後に書かれたと推測される「Creative Evolution 梗概」というノートの存在により明らかである。『創造的進化』でもド・フリースの突然変異説が取り上げられるが、ベルクソンは同説を紹介しつつも、定方向進化を主張する新ラマルク主義に近い立場を取り、生物はある程度一定の方向に向かって進化しようと努力しているとの見解を示した。そのため突然変異説については前述の有島のノートでは言及されず、同時代の日本のベルクソン解説書でも重要視されていない。鈴木貞美は、『創造的進化』が「ド・フリスの理論を哲学的に読み替え、生命力が自由にランダムに発現することによってこそ文化が創造的に発展する、というヴィジョンを提出した」（『「生命」で読む日本近代　大正生命主義の誕生と展開』平八・二、日本放送出版協会、六頁）と解説しているが、これはむしろ、有島のド・フリース受容にこそ当てはまるものであると言える。

19 佐々木さよ前掲論文、七〇頁。

20 なお、この戯曲は有島の友人である秋田雨雀による日本語訳『アグラヴエヌとセリセット』（大三・一一、金桜堂書店）として刊行された。

21 この「陶酔」という散文詩は、『パリの憂鬱』（一八六九）所収の«Enivrez-vous»（「酔え」）を指すと推測される。

22 Bは一月一五日の書簡で、「昨日風邪の気味で少し熱が高かつたから、学校に出ずにゐたら、Y子さんが色々世話をしてくれた。而して母は墓詣りに行つて（何と云ふ自己欺瞞だらう）居なかつたので、二人は割合に打解けて話をした」とあり、その際にY子の生い立ちなどを聞いたという。これに対してY子の手記では、「ある時――それは雨の降る日で御座いました――B様がしみ〴〵私に色々お話なさ

つた」という日にBを恋するようになったとあることから、Y子がBに恋愛感情を抱き始めた時点を、一月一四であると解釈した。

23 中村三春「蝕まれるべき友情――小説構造から見た『白樺』派の小説――」（『層――映像と表現』一五、令五・三）。

24 亀井秀雄「制度のなかの恋愛――または恋愛という制度的言説（イデオロギー）について」（『主体と文体の歴史』平二五・五、ひつじ書房）、三六七頁。

25 ルネ・ジラール『欲望の現象学　ロマンティークの虚偽とロマネスクの真実』（一九六一、古田幸男訳、昭四六・一〇、法政大学出版局）。

26 ロラン・バルト「書物　Le livre」（「恋愛のディスクール　断章（未刊テクスト）」、『恋愛のディスクール　セミナーと未刊テクスト』二〇〇七、桑田光平他訳、令三・一〇、水声社）。

27 山田昭夫前掲論文、二一七～二一八頁。

28 吉川浩満『理不尽な進化　増補新版』（令三・四、筑摩書房）。

29 佐々木さよ前掲論文、六九頁。

30 詳しくは、拙稿「大正後期恋愛論における有島武郎の位置――「恋愛の多角性」を巡って――」（北海道大学『国語国文研究』一五八、令四・二）を参照されたい。

31 このほか、有島の戯曲における恋愛の不確かさについては、拙稿「有島武郎「死と其前後」論――夫婦の愛をめぐって――」（北海道大学大学院文学院『研究論集』二二、令五・一）において論じた。

32 暉峻康隆『日本の書翰体小説』（昭一八・八、越後屋書店）、一三頁。

33 山本方平「明浄な美と愛」（「有島武郎氏に対する公開状」、『新潮』大七・一〇）、一一九頁。なお、山本は『宣言』を「死児」とも批判し、これに対して有島は「予に対する公開状の答」（『新潮』大七・一〇）で、「AもBもY子も不完全ながら生命は十分にあるやうに思はれてゐます」と回答している。

34 渡部杏美「書簡体小説研究――『若きウェルテルの悩み』と『宣言』の比較から――」（『富大比較文学』八、平二八・二）、九六頁。

35 中村三春前掲論文9。